

1993年の本。予想よりも、内容が面白かった。

今村大将(陸軍)の回想録をもとにした本。戦争で、兵器や戦術は変わっていく。その流れがわからないと、
二流軍隊になってしまう。精神論で鼓舞しても勝てない。

「欧州大戦の局外にあった日本は陸軍も海軍も一挙に旧式の二流軍隊になってしまうのだが、それに追いつく努力もまた著しく不足していた。」

「この大正時代の勉強不足、——特に機関銃・大砲・戦車・航空機・潜水艦などに関する認識不足と準備不足は、満洲事変から日支事変、大東亜戦争へかけて日本軍の大きな弱点となる。」

「昭和十二年以降の全面戦争で日本の若者は徴兵されて手渡された兵器が、日露戦争当時の三八式小銃と第一次欧州大戦終了後に英仏からバーゲンで買った大砲や機関銃、それも思想が陳列品的で打って打って打ちまくることは考えていなかったから弾薬は生産も不足なら備蓄も不足、したがって補給のシステムや補給用車輛の近代化も全然出来ていなかったという状態で戦闘させられたので、たいへん驚いたものである。その原因を当時の日本人は**日本は貧乏国だから仕方がない**と考えたものだが、**実は権力の中枢にいる人が長い間、職務に忠実でなく、もっと別のことに熱心だったから**だということがこの話でもよく分る。」

なお、日本陸軍という組織は恐竜のように巨大になりすぎて自己統制力を失い、暴走をつづけて遂には日本国を占領し、その占領をつづけるためにはアメリカにまで戦争をしかけてとうとう陸軍自身も日本帝国も崩壊させてしまった。

その原因をさぐると陸軍参謀本部や陸軍省の中堅幹部である**少佐、中佐、大佐クラスが大言壮語して上司を無視し、勝手に国政を動かした**ことが浮かび上がってくるが、どうしてそうなったかという、その原因の一つに陸軍大学校の教育がある。

今村均も書いているが、これは本来、「陸軍参謀学校」と命名すべきもので、単に参謀のあり方を教えただけなのに、それを「陸軍大学校」と命名したため、将来の司令官や陸軍大臣を養成する学校のように思われてしまった。

また、人事上の昇進もそのように行われたので、卒業生の多くは慢心して上を軽んずるようになった。そして**豊富な軍機密費をつかって右翼を養い、政治家を暗殺したり脅迫したりして、日本国家を私物化**してしまっただけである。

無責任で人間的には幼稚な人を秀才だからといってエリートにしたり、それに機密費をもたせたりしてはいけないという現在にも通用する教訓が得られるが、そうした集団の中にも自分を見失わなかった人がこの今村均である。

男の子が五人もいるわが家から一人も戦

争に行っていないのはお国に申し訳ないというのものもある。その頃は本当にそう考える時代だった。今の日本人はそうは考えないし、今後も永久にそうは考えないと思っているが、しかし人間の考えは環境に大きく支配されるので、もしも日本の置かれた環境が、将来、明治時代と同じようになれば、また、同じように考える人がたくさんになるだろうという

気がする。日本では“あの時はそうとしか言えないふんい気だった”という言い訳が昔も今も通用しており、その意味では昔も今も変りがない。つまり、日本では個人としての意見にほとんど意味がないというわけで、今村均の母の考えについて何かを言う資格がある人は現在もほとんどいないと思う。

これは戦記物を読み出してから知ったことだが、勝利とは何かについて軍人の社会ではいろいろな定義があるらしい。多分、素人が考えるような敵の戦力を壊滅させたとか、敵の大將が降伏したとか、敵の陣地を占領したとかの**簡単明瞭な勝利は実際には数少ない**からに違いない。

また、碁や将棋でもあることだが、捨て石とか捨て駒という戦術があつて局部的な敗戦は覚悟の上という場合があるから、一見敗けた方が実は勝っていたということも起こる。それからある戦いの結果を両方が勝った勝ったと言うことがあるが、それは単に宣伝の都合だけではなく着眼点の相違によることもあるわけだ。

今村均は日本陸軍の中で格別に偉い人だったという話は多くの人から聞くが、PHP 出版部の人が本書の企画を京都のタクシーの中で話していた所、突然、運転手が振りかえって、「あんなに偉い人はいなかった。自分はその人の第十六軍に属する兵隊としてジャワの上陸作戦に従軍したが、あの人は神様のようにみんなから慕われていた……」と熱情をこめて話したので驚いたということである。

つまり、公務は完全に達成し、しかも個人としての人格でも完成に近かった人ということになるが、不幸にして日本は戦争に敗れ、今村均はオランダ・オーストラリア・アメリカから戦犯に問われて、結局、十年の懲役刑を受ける。服役場所は東京の巢鴨（今のサンシャインビル所在地）とされたが、わざわざ申し出て旧部下が服役しているマメス島に移送され、そこで三年を過ごしている。

昭和二十八年、六十四歳の時、日本に帰り、昭和二十九年十一月刑期満了となり出所する。昭和四十三年八十一歳の時、東京・世田谷の自邸で亡くなった。

「私は歩兵課長も自分もまちがってないと思いますし、礼を失したことは申し上げなかったつもりですので副官殿におわびは致しません。しかし、教えていただきました旅順の戦訓は私の将来に実によい教訓でありました。その手始めに私と私の課の全書記で今夜徹夜し清書をすることに決心致しました」

これで和田大佐の顔がいつぺんに崩れ、「そうか、そんなにあの戦例を理解してくれたか。僕の短気はなかなかおらないしょうぶんでな……。つい大げさなことを言ってすまなかった。そうとなれば君の課も忙しいだろうから」ということで官房の方から加勢の書記も出、和田大佐は進んで軍務局長室へ出向いて暴言を謝すなど問題は一挙に解決したばかりか、軍務局と官房の仲はその後も長く円満になり、和田大佐はそれ以後、今村中尉起草の文書には一言も文句を言わなかった、ということである。

人間はいかに感情的かをこれで悟ったと回想録は結んでいるが、この回想録は全篇こうしたエピソードに満ちている。

このように少将が厳しいのには沿革があって、昔は軍人は大佐が最高だった。大佐のことを英語で**キャプテン**と言うが、これは陸軍なら隊長、海軍なら艦長で、その上は王様か皇帝が直々に就任する司令官しかなかった。ところが、ナポレオンが連戦連勝して全ヨーロッパの各方面に派遣軍を出したときのことだが、派遣軍はそれぞれの方面で各地の王様を相手に政治折衝もするようになり、一々ナポレオンに相談もできないので隊長の上に政治もできる將軍を置くことになった。將軍は戦争だけでなく、ナポレオンの代理として、和平や戦後秩序のあり方で決定できる権限をもったので**ジェネラル**（一般）と呼ばれた。

そんなわけで少将・中將・大將の將官は政治家も兼ねた格別の地位なのだが、陸大の入試に合格するとそれがほぼ確実になるのである。

しかも大事なことだが、明治・大正から昭和にかけての頃、**日本の首相は誰になるか**という**と陸軍大將になる場合が一番多かった**。だから、陸軍で偉くなることは首相への道で偉くなることでもあって、現在の常識で考えて、単に自衛隊で幕僚になることと考えるはいけない。

アメリカの戦争回想録にも、**日本軍の作戦は紋**

切型だったとの感想が各所に見られる。日本海軍の艦長達は初動攻撃には優れていたが、**混戦になってからは信じられないほど無能だった**とキング元帥は書いている。

机上の秀才を重視した弊である。

どこの会社でもそう

だが、下々は目がまわるほど忙しいのに一番上の人は悠々と新聞を読んだり、お茶を呑んだりしている。一見すると不合理な話だが、大組織の中にはちょうど**コマの心棒**のように**一点だけは動かない所**も必要なのである。そこに平常心が残っていて全体の動きが興奮に駆られて、当初は思いもかけなかった所へ突っ走ってゆくのを指摘するのは大事な役目である。

・・・

今村均はこうした経験から学んで、やがては自分自身の心の中に、成久王がいつもいるように修業を積んでゆく。偉くなる人はみんなそういう修業をするもので、東洋では座禅、書、和歌、茶の湯、舞など、西洋では教会での瞑想、器楽、散歩、ギリシャ哲学の読書、詩の暗誦など、種々、平常心の回復手段を上につける人は努力している。

才能・知識は大事だが、それは平常心の上に乗ったものでないと**大局を誤る**ものになるのである。

兵隊の人数は戦時・平時で増減するが、この場合は**約百六十名**、これが**中隊長**の指揮にあずけられ、それを補佐するのは兵隊から少しずつ昇進してきた准尉である。中隊の下には四ヶ小隊があり、**小隊はさらに分隊**に分れる。但し、教育期間中は内務班といって班単位で生活するが、兵隊をよくなくったり私用に酷使したりしたのはこの分隊長とか、班長

とかの下士官や、一年先輩の古兵である。

日本軍隊の実質的な中核は**班長**。

第一次世界大戦が終った時、英米仏の政府は**大量に発注した武器が終戦後も続々と完成**してくるのでその始末にこまった。一方、日本は欧州の戦場には直接参加しなかったので戦費の負担はなく、それどころか大戦中は英米仏及びドイツの産業が軍需産業に転換してその輸出が一時停止した隙に乗じて、東南ア・南米その他に向けて二級の民需品をたくさん輸出して大いに稼いだので、経済は大発展を遂げていた。

さらに欧米では航空機・大砲・戦車・機関銃・軍艦その他の兵器が急速に発達したが、戦火の外にいた日本陸海軍の装備は依然として日露戦争当時のままだったので、**日本軍は**一挙に旧式の**二流軍に成り下ってしまった**。

これだけの事情がそろえば**英米が日本に武器を売りこみ、また日本が武器を買いこむ**のは水が低い所へ流れこむようなもので、ちょうど現在、石油成金国のアラブへ英米仏の武器が大量に輸出されているようなものだった。

その事務が大増加したので、小柳津少佐がロンドン大使館に増派されてきたというのがこの話の始まりである。この時購入された武器及びそれをそっくりそのまま模倣して製作した大砲や機関銃は、そのまま日支事変や大東亜戦争にも使用された。今村均大尉も小柳津少佐もこの時から約二十年後には、その大砲や機関銃を馬に引かせたり人間がかついたりして、中国や南方の島で戦うことになる。

上原参謀総長から今村少佐への質問

「このうちで、君の英軍隊附報告書は、とくに興味深く見た。が、腑におちんところが二、三ある。それを説明したまえ。第一は、英軍歩兵小隊六個分隊中、その三個だけが軽機関銃をもち、他は小銃だけの分隊にしてある。この点、仏軍とちがってる。フランスは、戦後全分隊に軽機をもたせることにしている。欧州西方戦場で、相ならんで戦闘した両国軍が、**別々の編制にしている理由をききたい**」

「それは全部を軽機分隊にいたしますと、歩兵の突撃力を減ずるためと思います」

「思いますというのは、君がそう思うという意味か」

「さようであります」

「そうじゃない。フランスとちがった編制にしている英軍は、いかなる理由で、そのようにしたかをきいているのだ」

「双方が、なぜ別々の編制にしているのか、両軍の主義をたしかめておりません」

「君は戦争中、又戦後に亘り、あちらにいたのだ。英仏軍についての従軍武官とは、しばしば会っているだろう。**あのような激戦を経験しなかった日本軍将来の歩兵隊編制を、どうすべきかに考え及んだなら、すぐこの点をききただして置くべきだった**。それをたしかめなかったのは手落ちだ。疑問の第二点は、歩兵小隊の戦闘法で、“軽機分隊は、成るべく小隊の翼方面に使用することになっている”と、君の報告には見えている。その理由？」

「中央よりは、翼側の方が、火力の發揮に便利だからであります」

「軽機分隊中の小銃兵は尠(すくな)い。それを翼の方に位置させれば、警備力不足のため、小隊全部の安全度を害する。この点をどう補っているか」

「小隊の第二線分隊を、翼の後方に位置させておけば、警備にそなえることができます」

「それも君がここで気づいた常識的の答えだろう」

「さようであります」

第一次欧州大戦でドイツとイギリス・フランスは、近代工業力の粋を尽くした新兵器を次々と戦場に送り出して戦ったので、兵器の進歩に伴って戦術戦法はもちろん軍の編成や指揮命令の考え方も大きく変化し、**欧州大戦の局外にあった日本は陸軍も海軍も一挙に旧式の二流軍隊になってしまうのだが、それに追いつく努力もまた著しく不足していた。**

それは眼前の脅威だったロシアが共産革命で混乱状態に陥り、東洋進出どころではなくなったこともあるし、また、第一次欧州大戦後は全世界的にもう戦争は当分あるまい、という平和一色の時代が到来したということもある。しかし、実際にはこの時から十年後には早くも満洲事変が始まるのであり、この大正時代の勉強不足、——**特に機関銃・大砲・戦車・航空機・潜水艦などに関する認識不足と準備不足は、満洲事変から日支事変、大東亜戦争へかけて日本軍の大きな弱点となる。**

そうした意味で、時代遅れの装備と作戦のため苦戦を強いられた日本国民は、日本軍の新兵器や新戦術に対するほとんど伝統的とも言える鈍感さと準備不足を今も不思議に思っているのだが、その理由の一端がここでも窺えるところが面白い。

情報収集の第一線に立つ責任者が、今村均でも本間雅晴でもこの程度にしか先進国を観察していないのであり、**国内の青年将校達にもその報告書を精読して互いに討論しようという気風がない。**僅かに引退寸前の上原参謀総長ただ一人が勉強し、心配しているだけらしいが、海外派遣の今村均がその指摘を半分うるさがついてきている位だから、その後の山梨軍縮・宇垣軍縮とつづく日本陸軍の近代化が不徹底だったのも無理はない(この軍縮は人件費を圧縮して装備費にまわしたもの)。

昭和十二年以降の全面戦争で日本の若者は徴兵されて手渡された兵器が、日露戦争当時の三八式小銃と第一次欧州大戦終了後に英仏からバーゲンで買った大砲や機関銃、それも思想が陳列品的で打って打って打ちまくることは考えていなかったから弾薬は生産も不足なら備蓄も不足、したがって補給のシステムや補給用車輛の近代化も全然出来ていなかったという状態で戦闘させられたので、たいへん驚いたものである。その原因を当時の日本人は日本は貧乏国だから仕方がないと考えたものだが、実は権力の中枢にいる人が長い間、職務に忠実でなく、もっと別のことに熱心だったからだということがこの話でもよく分る。

それは昭和になってからの戦争で、日本陸軍は機関銃と戦車と大砲については子供以下だった**事実があるので、上原元帥のこの時の指摘の正しさと、それを聞いても動こうとしなかった陸軍中枢部の怠慢な空気が残念に思えるところから生じる感想である。**

皇道派は昭和十一年の二・二六事件と呼ばれるクーデターの失敗で鎮圧され、要路から退けられるに至るが、クーデターに訴えるかどうか、という手段の選択に差はあっても現状にあきたらないとする陸軍の気持は統制派も同じなので、二・二六事件後も陸軍の革新的な動きというか勢力拡張というか、ともかく日本全体を右傾化、ファッショ化、軍国化させようとする動きはますますそのテンポを早めていった。

また、国民もそうした陸軍の動きに対してなかなか強い支持をあたえた。その理由としては、国民の過半を占める農民の生活があまりにも貧窮であるのに対し、他方、都市に住む華族、官僚、インテリ、商工業者等の生活がかけ離れて裕福だったことが挙げられる。**現在では想像も出来ないような所得格差があり、それが人格的な格差にもなっていた。**たとえば、農民の娘の多くは都市の官僚や商工業者の家庭に女中として奉公に出たが、そこでの貞操はあまり保護されているとは言えなかった。金縛りである。

だが、世界情勢不穏の折柄、日本人は何かを中心に団結すべきであって、その軸には天皇が一番だとも思っていた。そしてソ連やアメリカから伝来する思想は、多分、謀略か宣伝であり、それに傾倒するのはやがては国家への裏切りや利敵行為につながるのではないかという用心もあった。そこへ陸軍がその豊富な**機密費を投じて火をつけた国民運動による国粹主義が高まってくる。**そこで人々は、**身の安全のため争って国粹主義者ぶるようになる。**そして、反国粹的な現象や人物を探し出して、逸早くそれを弾劾攻撃することで自分が国粹的で体制的であることの証明にしようとした。

そういう**付和雷同の国粹主義**の時代が始まろうとしていたのがこの時期で、そういう時期にあえて人々から伝染病のように思われ忌避されている思想犯や共産党員と交際をもつなどは、普通の人には到底できないことだった。

性善説で行動すると相手も多少はそうなるし、**性悪説で行動すると相手もそうなるのが人の世である。**

今村均は自軍の前面に中国軍の大軍が出現した理由を専ら南寧の重要性のためと解釈しているが、蒋介石の方は国家総力戦的な見地から**日本軍の進攻は限度にきたとみて総反撃を決意した**のであって、それが分らなかった日本の将軍達は着眼点がやや低かった。幸い制圧には成功したが、しかし、その時、日本の**中国派遣軍の総兵力は三十四個師団に達しており、日本本土に残っているのはわずかに近衛師団ぐらいだったから、日本も苦しかった。**決して、日本はアメリカには負けたが中国には楽に連戦連勝した、と言えるような状況ではない。

日本人は状況が困難になるとその合理的な解決を考えるよりも、とかく精神的・抽象的

になり神がかり的な“純粹の美学”と“破滅の美学”に逃避する。平家滅亡の讚美にはそれがある。

戦争が敗戦つづきで勝利の見込みが遠くなった昭和十九年、二十年にはこうした純粹の美学や破滅の美学は一層勢力を拡大して、兵士が兵器に敬礼させられたり、追いつめられるとすぐに全軍を挙げたバンザイ突撃を敢行して米軍を喜ばせたりする。残敵掃討の手間が省略されるからである。

究極の目的を見失わないのは一軍を指揮する将軍の大事な資質であって、それが出来ない上級管理職はすぐに局部的な損得や他人の評判などを気にして、大局観を失い“純粹の美学”に頼って、結局は“破滅の美学”へと歩を進めることになる。これは企業経営でも同じことである。海軍では艦長が艦と運命を共にして死ぬという美学があったが、戦争が日本海大海戦のような短期決戦型でなく長期消耗戦となって、軍艦は何百隻となく大量生産され、同時に大量撃沈されるようになった戦争後半期には艦長の育成と補充の方が大問題となって、その美学は禁止されるに至った。零戦その他の搭乗員も、飛行機と運命を共にするのが美とされパラシュートをつけない風習があったが、やがてそれは修正された。